《エッセイ》

ある古代学の行方

―『上山春平と新京都学派の哲学』書評会余録―

鈴木 健吾

はじめに―頗るプライベートな動機―

2021 年 2 月 13 日、キャンパスプラザ京都にて歴史論研究会主催の菅原潤『上山春平と新京都学派の哲学』(晃洋書房、2019 年) の合評会が行われ、委員である筆者も評者として「第 5 章 神々の体系と「古層」論―それぞれの天皇制との対決―」を題材に上山春平(1921-2012)による日本古代史叙述、あるいは新京都学派の古代学について論評を試みた。思想史的なトレーニングとしても、あるいは自身の好古趣味としても愉しいものであったが、自身の学位論文などに関わる研究とはやや距離があり、「言い逃げ」でよいか、とも思っていた。

ところが筆者が先年、本業と「夜店」で行った二つの報告がその認識を覆した。まず、委託講演として行った「菜の花は臺が立ってから花が咲いたのか？―坂本多加雄と「土曜会」―」(「日本文明」研究フォーラム主催、2022 年 10 月 29 日) では、平成初期によく知られた保守系論客の坂本多加雄 (1950-2002) の若年時の原稿を発掘し、坂本が中央公論社の名物編集者粕谷一希の影響圏で思想形成したことを眼目の一つとして報告した。また、同時期に「「考古学が歴史学であるために」―小林行雄と戦後日本の国家起源論―」(第 120 回史学会日本史近現代史部会、同年 11 月 13 日) と題して京都大学の考古学者小林行雄 (1911-89) を題材に、日本の考古学のメインテーマが人種論から国家起源論に振っていく過程を見直し、1960 年代前半の小林と東大国史の井上光貞 (1917-83) との間の論争を古代史の主導権がアカデミズムにあったギリギリの時期の出来事としてとらえた[1]。この二つの報告は無論全く独立したものである。

しかるに、この二つの論には存在しないはずの「間」が存在した。中央公論社引き受けの時期の『思想の科学』周辺から立身し、京大人文研の明治維新研究や 70 年代のアカデミズム外の古代史で多くの啓蒙書を記した上山春平である。たとえ文字通りの「研究ノート」「史料紹介」となっても、書評会 (とその後の多少の調査・思索) の成果を還元することは、上山の後輩である梅原猛が 2019 年に没し、新京都学派による古代学が完全に歴史化されたように思われる現下、充分な意義があると考えるからである。

本稿ではまず、書評会の成果を粗々にまとめる、その後、書評会当日はできなかった上山

[1] 刊本が研究の中心となる古代史は一般論として史料調査の便を持たない非専門家が参入しやすい。戦後の日本古代史における学問的叙述とそこから切り離された一般向け歴史叙述という問題については、庄子大亮『アトランティス=ムーの系譜学 〈失われた大陸〉が映す近代日本』講談社選書メチエ、2022 における 1967 年の宮崎康平『まぼろしの邪馬台国』刊行以降の「邪馬台国ブーム」を画期とみなす認識を追認する。

自身が認識した文学部国史系からの上山批判を検討し、結果的に日本古代史にはならなかった上山の古代史研究の意義について現状考えているところを述べていきたい。

1. 哲学者の古代史

カント研究者として出発した上山は戦後プラグマティズム研究に転回していく。1950 年代後半の『思想の科学』周辺を回顧する粕谷も上山春平を、市井三郎らとともに「戦後の記号論理学、論理実証主義の流れの勉強会」[2]の流れの人間と位置付ける。そのような上山が「歴史」の人間としても認識される来歴を鮮明に描いたのは、哲学史家ではなく日本史家の山口輝臣による「哲学者による維新」であろう。マルクス主義を戦前に経験していない京都学派の哲学者が戦後和歌山・田辺での教員生活時代の古代史家・北山茂夫の手ほどきでマルクス主義を学び、戦後のマルクス主義史学のヘゲモニーの中で 1950 年代前半には講座派の定式的な理解で日本近代を理解するも、桑原武夫率いるフランス革命の共同研究で見解を変え、明治維新をブルジョワ革命とする理解を提示していき、井上清や遠山茂樹との論争などで当時のマルクス主義史学の向こうを張る。そのような上山の姿勢を「カント一筋うん十年といった姿とは、あきらかに異なる」[3]ものとし、実験・実践によるドグマ解体のための哲学としてとらえる山口の見解は妥当であるように思われる。

そこで残されてしまうのが 1970 年代を中心に展開された上山の古代史論である。講座派的な歴史観の解体の中で先駆者となった感さえある明治維新論、あるいは数次の「歴史修正主義」の荒波の中で「大東亜戦争」の呼称復活の先駆と位置付けられる大東亜戦争論[4]と比べ、藤原不比等の設計・述作として日本の古代国家を考える論法が全体的に劣勢となり、前世紀末の吉川真司の単著でとどめを刺された感がある[5]。無論、藤原不比等による作品として国家をとらえる論法が否定されているわけではない[6]が、主流の見解とは言えまい。書評会においては、ここで筆者は菅原の著作と意見をたがえ、藤原不比等を律令国家の設計者ととらえ、記紀をそのイデオロギーを支える仮構とするような上山の古代史叙述を、可能性はありつつも主流にならなかった学説体系とした。

如上の状況を前提に本稿で行うのは、同時代の上山古代学をめぐる言説の紹介と若干の整理である。明治維新論の経緯を見てもわかる通り、上山は専門外の立場から独自の立場を設定しているものの、論争の対象としているのは斯界の専門家であり、専門家からの反論な

---

[2] 粕谷一希『中央公論社と私』文藝春秋、1999 年、72 頁。

[3] 山口輝臣「哲学者による維新―戦後史学史のなかの上山春平―」『史淵』九大史學會、152 号、2015 年。70 頁。

[4] 庄司潤一郎「日本における戦争呼称に関する問題の一考察」『防衛研究所紀要』防衛研究所、第 13 巻第 3 号、2011 年、52-53 頁。

[5] 吉川真司『律令官僚制の研究』塙書房、1998 年。吉川は第 4 章「藤原氏の創始と発展」において、藤原氏を律令国家の設計者とする思考法そのものに社会構築主義を適用し、院政期に藤原氏と天皇家が相補性を持つとする議論が創始されたとした。

[6] 上山の『神々の体系』『埋もれた巨像』をもとにした大山誠一『天孫降臨の夢―藤原不比等のプロジェクト―』（NHK ブックス、2009 年）の第 II 部「天孫降臨の夢」第 2 章「藤原不比等のプロジェクト」など。

どを実は丁寧にフォローしていた。というのも、後述するが、『神々の体系』の批判が『続・神々の体系』に収録されるなど、上山が同時代の古代史家からの反論に如何に返答しているのかは比較的容易に知ることができ、その検討は上山説の検討のみならず、梅原古代学に続く新京都学派の古代史の位相を考えるためにも不可欠であるからだ。

2. 神々の体系をめぐる邂逅

上山の古代史への転回は、戦地に『古事記』を持って赴いた戦場経験、北山茂夫らの影響に加え、菅原が着目するように梅棹忠夫（乃至京大学士山岳会）の影響圏にあった上山の歴史研究が「比較文明史」として存在したがゆえ、必然のものと言えるだろう。最終的に 1990 年の『日本文明史の構想』に結実する上山の日本文明論は、自然社会・第一次文明（農業社会）・第二次文明（工業社会）に人類史を三等分し、日本文明の特質を「凹型文明」「ネガ」としてとらえるというものだが、その方法論の都合上、自然社会と第一文明の継ぎ目となる律令国家形成期が問題となる。佐々木高明らと「照葉樹林文化」研究に取り組み、1969 年出版の『日本文化の深層』で日本の「基層文化」たる縄文文化を論じた上山は、歴史時代の始まりともいえる古代史に分け入っていく。彼は中央公論社の『歴史と人物』連載を編集し、1972 年に出版された『神々の体系』で「東大寺献物帳」所載の「黒作懸太刀」とその相伝の過程に着目して、津田左右吉の記紀読解を批判しながら、「天皇家のためというよりはむしろ藤原家のためと見るべき」[7]記述として記紀をとらえた。日本古代史の一次史料を解さないことを認めていた上山だが、なればこそ本書は青木和夫、上田正昭、北山茂夫らの古代史家、あるいは小林行雄のような考古学者の所論を引用し自説を整理している。そもそも、「黒作懸太刀」の存在自体を法制史家の石尾芳久の所説から知ったことということが瀧川政次郎の所説などとあわせ明記されており[8]、専門的な議論のディスコースのなかに自身の新説を埋め込んでいくことでその価値をあげていくという戦略を明瞭にとっていた。折からもその年の 3 月に高松塚古墳壁画が発見され、一般読書界も含めて古代史ブームが吹き荒れていた。

しかし、この戦略をある程度の地位・知名度を持つ専業研究者が取る場合、言うまでもなく想定されるのが当該分野「専門家」からの反論である。早期の主要な反論は 1975 年に出版された『続・神々の体系』第二章に明記される青木和夫と井上光貞によるものといえよう。『神々の体系』の書評特集欄で青木和夫（1926-2009）は、日本人に歴史を教えているのが学者ではなく作家であるという時代小説家の海音寺潮五郎の言を半ば肯定しつつ、「自分の狭い専攻」にかかわった上山について「不比等体制」を「天皇制」に優越させることを批判している[9]。同じ紙面には『神々の体系』と同じく 1972 年刊行の梅原猛『隠された十字架』を同時に扱う高橋富雄「神代史における神々の体系」が掲載され、そこで高橋は「セオリー

---

[7] 上山春平『神々の体系』中公新書、1972 年、113 頁。

[8] 同上、170-171 頁。

[9] 青木和夫「記紀の持つ政治的な意味　誤解を招く「不比等体制」という概念」『日本読書新聞』、1972 年 10 月 30 日。

露出」に辟易しつつ「歴史家だけが、わが物顔に歴史を料理してきたアラカルト歴史」の終わりを感じている。

そしてある意味本番ともいえるのが、当時の東大国史の教授井上光貞（1917-83）による1972年の批判である。『読売新聞』での全四回の連載「日本古代史と津田左右吉」[10]において井上は、自身が支持する津田左右吉の記紀研究について1972年に出版された二つの挑戦、家永三郎の『津田左右吉の思想史的研究』と『神々の体系』を取り上げ、それらへの批判を試みる。当時教科書裁判の当事者だった家永の見解（過剰な記紀軽視）などを批判したのち、連載の第三回「六世紀に視点を―上山氏の「神々の体系」の問題点―予想された“不比等説”」が原記紀たる帝紀・旧辞について史実としては誤りとしつつ、六世紀段階の思想としては価値があるとしたことそのものの克服として価値はあるとしても、記紀の記述すべてを編纂段階（不比等）の潤色とすることは無理筋であると指摘する。さらに第四回「無視された津田の記紀成立論　発展的超克が課題　戦前戦後の誤解を解いて」では、戦後の言論空間で津田の記紀批判だけが断章取義されたことを嘆き、『神々の体系』に紙幅を割いたのは「その意図に津田の積極的な継承として積極的なものを認めた」からであるとし、津田学説を基点としてそれを克服することを日本古代史の未達成の課題とした。中央公論社『日本の歴史』シリーズの第一巻『神話から歴史へ』が出版され、啓蒙書レベルに戦後歴史学の成果が還流してある程度の時間が経過した70年代前半、上山は井上（と青木）の著作を読んでいることに言及しつつ、当惑気味に見える。というのも、近代思想史として津田を研究した家永と違い、『続・神々の体系』を執筆した上山は、「津田の学問や思想の研究をテーマとしているわけではない」[11]からである。議論はすれ違っているが、井上が上山に歴史学的手続きに基づく徹底した記紀批判という津田左右吉の問題意識の継承の可能性を見たことは重要であろう。

最後に、かなり後の時点になるが、1977年に『埋もれた巨像』を出版したのち、85年に出版された『天皇制の深層』で言及される、学習院大学教授の黛弘道（1930-2010）の批判が挙げられようか[12]。黛は単著の論文などでも批判しているが、上山が特記する『歴史公論』での座談では、不比等の過大視とならんで天孫降臨説話における書紀本文での天照大神の不在（タカミムスビが天孫降臨を命じる）を批判する。それに対して上山は、古代の氏族系譜の基礎となる『新撰姓氏録』が平安初期の編纂であることから、記紀段階で黛の所説が通じるかに疑問を呈していく。ここでも「専門家の批判にはよろこんで耳をかたむけ、それが納得のゆくものであれば、ただちに受け容れたい」[13]という姿勢は堅持された。

3. 外在的な、あまりにも外在的な？

---

[10] 井上光貞「日本古代史と津田左右吉」〈1〉～〈4〉『読売新聞』、1972年10月28日～11月1日。30日のみ掲載せず。

[11] 上山春平『続・神々の体系』中公新書、1975年、61頁。

[12] 神田秀夫・横田健一・黛弘道「座談会　記紀をどう読むか」『歴史公論』第四巻一号1978年。

[13] 上山春平『天皇制の深層』朝日選書、1985年、160頁。

この後平成にかけて上山は日本古代史に着目し、古代史に哲学の方法論からなる一大大系を打ち立てた…とはいいがたい。上山は 1978 年時点の原稿で「昨年の秋に『埋もれた巨像』（岩波書店）が出たとき、久しぶりで一山越したなあという思い」[14]を懐いている。これは、近代史に同時代史に古代史にと多くの成果を挙げながら、当然時代別専門家にはならなかった上山が、律令制形骸化の時代として中近世移行期を研究する為、京都の中世山城研究に転じたからである。人文研の同僚山下正男らとともに国家史研究という名目で行われた踏査は、山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭—復元図と関連資料—』（京都大学人文科学研究所、1986 年）に結実し、2010 年代の『京都府中世城館跡調査報告書』の刊行京都地域の考古学や地域史に影響を持ったが、その完成以前の段階から中世史（文献史）の研究の穴をついたことは、京大教養部の上横手正敬や室町・戦国期研究で平成期に巷間にも知られることになる今谷明の高い評価も受けている[15]。1984 年に国立大学の教壇を降りた上山は京都国立博物館の館長職や中世山城の研究を古代史研究より優先していくことになった。

一方、上山をもっとも根本的に批判した井上に眼を移すと、1970 年代、東大文学部や執行部の管理職を歴任しつつ大化の改新否定論や好太王碑の碑文改竄論などの多くの論争に消耗し、1976 年に心臓発作に見舞われる。その翌年度に東大を退官し、国立歴史民俗博物館の発足と共同利用研究機関化に挺身、回顧録や月報から看取できるように、本人や周囲の想定より早くその生涯を閉じた[16]。本稿に「井上光貞論」の用意はないが、帝室制度編纂室で机を並べた仏教史の先達家永に論争を挑みつつ、井上自身は津田評価の再考に向かうことはなかったように思われる。かくして、怨霊信仰をめぐる議論などで一般読書人も含めて深い影響を残す梅原とは異なり、上山は学問体系に巨大な疑問を投げかけつつ、1980 年代には古代史から撤退し、専門研究レベルでは 90 年代に論破されたとするのが適当だろう。その場合、津田学説を論難し記紀の事実性の再考を主張するという戦後史学への根本的な挑戦は大化の改新否定論を引っ提げて井上に挑んだ原秀三郎が 2002 年に出版する『地域と王権の古代史学』を俟つことになる、というのが平凡かつ暫定的な結論となろうが、本稿はそれ以前の論壇と専門分野の間にあった少しく外在的な史学史／メディア史的な挿話となる。

おわりに

2020 年代、上山古代学を支持するのはなかなか容易ではあるまい。例えば神野志隆光以降に生きる我々が「記と紀は一緒の扱いでよいのですか」式の「クソリプ」を言うのは容易

---

[14] 上山春平『城と国家』小学館、1981 年、15 頁。

[15] 上山春平・梅原猛・上横手雅敬・河合雅雄・作田啓一「シンポジウム—中世—律令制崩壊の過程—」『創造の世界』小学館、第 24 号、1974 年；今谷明・上山春平・梅原猛・河合雅雄・作田啓一「シンポジウム—山城の構造と天皇制—」『創造の世界』小学館、第 29 号、1979 年。

[16] 井上光貞『わたくしの古代史学』（文藝春秋、1982 年）第 11 章「第二の人生をむかえて」を参照。

であるし、その批判は恐らく当たっているからである。しかし、戦後史学の学知が一般向けに普及し、それゆえに学問的な権威に挑戦することが価値を持った時代に上山は梅原と並び、専門の歴史家との論戦に挑んだ。そして殊に、上山は熱心に専門家と交流し、応酬を繰り広げたように見える。本編で紹介した書評や座談にもその一片は伺えようが、意外なかたちで上山の名前を見ることができる。

> 当時の論壇の見取り図を描こうとすると、梅棹さんの同世代では、政治学の永井陽之助さん、歴史では上山春平（一九二一一年、哲学）さん……。永井陽之助さんの前に高坂君が出てきたが、彼らのような「ネオリアリスト」が力を発揮してきたのだ。

人文学の編制がわからないうっかりさんの文章というなかれ。梅棹忠夫と司馬遼太郎が関西論壇・文壇を支配した時代を振り返るという趣旨での粕谷の筆である[17]。新京都学派の総帥たる桑原武夫は梅原猛に対して上山を「秀才の最たるもの」[18]と評したとされるが、これは、専門家の土俵にわざとのり、「素人」として「専門家」との対峙を続けた上山への最大級の賛辞と言えないだろうか。後輩・梅原猛へと続く新京都学派の古代学の物語は適者が書くべきであろうが、それへ向けての素材の提供くらいになったらと思う。

私自身が過去に日本古代史を専攻しようと思ったことがあったこと、さらに参考文献の文筆に指導関係になったことのある人が複数いるという全く個人的な事情により、「エッセイ」にしては異様な緊張感を持ちつつ書いた。機会を頂いた対象図書の菅原潤先生や評者の谷川嘉浩・渡辺恭彦両氏、及び書評会の司会をつとめた吉川弘晃代表はじめ歴史論研究会委員に感謝する。この原稿が公開される頃には筆者の司会による菅原潤『梅原猛と仏教の思想』（法藏館、2022 年）の書評会も終わっていることと思うが、これら一連の著作とその書評が新京都学派研究のみならず、古代史（学史）・出版史・啓蒙的な哲学の歴史などの起爆剤として作用することを願ってやまない。

---

[17] 粕谷一希『作家が死ぬと時代が変わる』日本経済新聞社、2006 年、188 頁。

[18] 梅棹忠夫・梅原猛「未来構想」杉本秀太郎編『桑原武夫—その文学と未来構想—』淡交社、1996 年、115 頁、梅原発言。